

# 隅田川

結崎十郎作

世阿弥作とも

ワキ 渡守

ワキツレ（男） 旅人

シテ 母（狂女）

子方 梅若丸亡霊

地は 武蔵

季は 三月

ワキ詞

「是は武蔵の国隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又此在所にさる子細有つて。大念仏を申す事の候ふ間。僧俗を嫌はず人数を集め候。其由皆々心得候へ。」

男次第

「末も東の旅衣。く。日も遙々の心かな。」

詞

「かやうに候ふ者は。都の者にて候。我東に知る人の候ふ程に。彼者を尋ねて唯今まかり下り候。」

道行

「雲霞。あと遠山に越えなして。く。いく関々の

道すがら。国々過ぎて行く程に。こゝぞ名におふ

隅田川。渡りに早く着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。是は早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。

如何に船頭殿舟に乗らうずるにて候。」

ワキ詞

「中々の事めされ候へ。先々御出で候跡の。けしからず物騒に候ふは何事にて候ふぞ。」

男

「さん候都より女物狂の下り候ふが。是非もなく面

白う狂ひ候ふを見候ふよ。

ワキ 「さやうに候はゞ。暫く舟をとめて。彼物狂を待たうずるにて候ふ。

シテサシ 「実にや人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ白雪の。道行人に言づてゝ。行方を何と尋ぬらん。聞くや如何に。上の空なる風だにも。

地 「松に音する習ひあり。

シテ 「真葛が原の露の世に。

地 「身を恨みてや明け暮れん。

シテ 「是は都北白河に。年経て住める女なるが。思はざる外に独子を。人商人に誘はれて。行方を聞けば逢坂の。関の東の国遠き。東とかやに下りぬと。聞くより心乱れつゝ。そなたとばかり思子の。跡を尋ねて迷ふなり。

下歌地 「千里を行くも親心。子を忘れぬと聞く物を。

上歌

「もとよりも。契り仮なる一つ世の。く。其内  
をだに添ひもせで。こゝやかしこに親と子の。四  
鳥の別れ是なれや。尋ぬる心の果やらん。武蔵の  
国と。下総の中にある。隅田川にも着きにけり。  
く。」

シテ詞

「なふく我をも舟に乘せて賜はり候へ。」

ワキ詞

「お事は何くより何方へ下る人ぞ。」

シテ

「是は都より人を尋ねて下る者にて候。」

ワキ

「都の人といひ狂人といひ。面白う狂うて見せ候へ。」

狂はずは此舟には乗せまじいぞとよ。

シテ

「うたてやな隅田川の渡守ならば。日も暮れぬ舟に

乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を。

舟に乗るなと承るは。隅田川の渡守とも。覚えぬ

事な宣ひそよ。

ワキ詞

「実にく都の人とて。名にし負ひたる優しさよ。」

シテ

「なふ其詞はこなたも耳に留るものを。彼業平も此

渡りにて。名にしおはゞ。いざ事問はん都鳥。我  
思ふ人は有りやなしやと。なふ舟人。あれに白き  
鳥の見たるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれを  
ば何と申し候ふぞ。

ワキ 「あれこそ沖の鷗候ふよ。

シテ 「うたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ。な  
ど此隅田川にて白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ。

ワキ 「実にく誤り申したり。名所には住めども心なく

て。都鳥とは答へ申さで。

シテ 「沖の鷗と夕波の。

ワキ 「昔にかへる業平も。

シテ 「有りや無しやと事問ひしも。

ワキ 「都の人を思妻。

シテ 「わらはも東に思子の。ゆくへを問ふは同じ心の。

ワキ 「妻を忍び。

シテ 「子を探ぬるも。

ワキ 「思ひは同じ。

シテ 「恋路なれば。

地

「我も又。いざ事とはん都鳥。く。我思子は東路に。有りやなしやと問へどもく。答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいひてまし。実にや舟ぎほふ。堀江の川のみなぎはに。来居つゝ鳴くは都鳥。それは難波江これは又。隅田川の東まで。思へば限りなく。遠くも来ぬる物かな。さりとは渡守。

舟こぞりて狭くとも。乗せさせ給へ渡守。さりとては乗せてたび給へ。

ワキ 詞

「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。此渡りは大事の渡りにて候。かまひて静に召され候へ。

男 詞

「なふあの向ひの柳の本に。人の多く集まりて候ふは何事にて候ふぞ。

ワキ 詞

「さん候ふあれは大念仏にて候。それにつきてあは

れなる物語の候。此舟の向ひへ着き候はん程に語  
つて聞かせ申さうずるにて候。さても去年三月  
十五日。しかも今日に相当つて候。人商人の都よ  
り。年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて  
奥へ下り候ふが。此幼き者。いまだ習はぬ旅の疲  
れにや。以ての外に違例し。今は一足も引かれず  
とて。此河岸にひれふし候ふを。なんぼう世には  
情なき者の候ふぞ。此幼き者をば其まゝ路次に捨

てゝ。商人は奥へ下つて候。さる間此辺の人々。  
此幼き者の姿を見候ふに。よし有りげに見え候ふ  
程に。さまぐに痛はりて候へども。前世の事に  
てもや候ひけん。たんだ弱りに弱り。既に末期と  
見えし時。お事はいづく如何なる人ぞと。父の名  
字をも国をも尋ねて候へば。我は都北白河に。吉  
田の何某と申しゝ人の唯ひとり子にて候ふが。父  
には後れ母ばかりに添ひ参らせ候ひしを。人商人

にかどはされて。かやうになり行き候。都の人の足手影もなつかしう候へば。此道の辺りに築き籠めて。しるしに柳を植ゑて賜はれとおとなしやかに申し。念仏四五返称へ遂に事終つて候。なんばうあはれなる物語にて候ふぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念仏を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。とう／＼御上り候へ。

男詞

「如何さま今日は此所に逗留仕り候ひて。逆縁ながら念仏を申さうずるにて候。

ワキ

「如何に是なる狂女。何とて舟よりは下りぬぞ急いで上り候へ。あらやさしや。今の物語を聞き候ひて落涙し候ふよ。なふ急いで舟より上り候へ。

シテ

「なふ舟人。今の物語はいつの事にて候ふぞ。

ワキ

「去年三月今日の事にて候。

シテ

「さて其児の年は。



ワキ「十二歳。

シテ「主の名は。

ワキ「梅若丸。

シテ「父の名字は。

ワキ「吉田の何某。

シテ「さて其後は親とても尋ねず。

ワキ「親類とても尋ねこず。

シテ「まして母とても尋ねぬよなふ。

ワキ「思ひもよらぬ事。

シテ「なふ親類とても親とても。尋ねぬこそ理なれ。其  
幼き者こそ。此物狂が尋ぬる子にては候へとよ。

なふ是は夢かやあらあさましや候。

ワキ詞「言語道断の事にて候ふ物かな。今まではよその事  
とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひける  
ぞやあら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候  
ふべし。こなたへ御出で候へ。

シテ「今まではさりととも逢はんを頼みにこそ。知らぬ東に下りたるに。今は此世になき跡の。しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて。生所を去つて東のはての。道の辺りの土となりて。春の草のみ生ひ茂りたる。此下にこそ有るらめや。

地「さりとては人々此土を。かへして今一度。此世の姿を。母に見せさせ給へや。

歌「残りても。かひ有るべきは空しくて。く。有る

はかひなきはゝきゝの。見えつ隠れつ面影の。定めなき世の習ひ。人間うれひの花盛。無常の嵐音添ひ。生死長夜の月の影。不定の雲おほへり。実に目の前の憂き世かな。く。

ワキ詞「今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念仏を御申し候ひて。後世を御弔ひ候へ。

カ、ル「既に月出で河風も。はや更け過ぐる夜念仏の。時節なればと面々に。鉦鼓を鳴らし勧むれば。

シテ「母は余りの悲しさに。念仏をさへ申さずして。唯  
ひれふして泣き居たり。

ワキ「うたてやな余の人多くましますとも。母の弔ひ給  
はんをこそ。亡者も喜び給ふべけれと。鉦鼓を母  
に参らすれば。

シテ「我子の為と聞けばげに。此身も梟鐘を取り上げて。

ワキ「歎きをとゞめ声澄むや。

シテ「月の夜念仏もろともに。

ワキ「心は西へと一筋に。

二人「南無や西方極樂世界。三十六万億。同号同名阿弥

陀仏。

地「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

南無阿弥陀仏。

シテ「隅田河原の波風も。声立て添へて。

地「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

シテ「名にしおはゞ。都鳥も音を添へて。

地、子方「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。」

シテ詞「なふく今の念仏の内に。正しく我子の声の聞え候。此塚の内にて有りげに候ふよ。」

ワキ詞「我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念仏をば止め候ふべし。母御一人御申し候へ。」

シテ「今一声こそ聞かまほしけれ。南無阿弥陀仏。」

子「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏と。」

地「声の内より。幻に見えければ。」

シテ「あれは我子か。」

子「母にてましますかと。」

地「互に手に手を取りかはせば。又消えくとなり行けば。いよく思ひは増鏡。面影も幻も。見えつ隠れつする程に。東雲の空もほのぐと。明け行けば跡絶えて。我子と見えしは塚の上の。草茫々として唯。しるしばかりの浅茅が原と。なるこそあはれなりけれ。く。」

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評釈 第九輯』 大和田建樹 著